

乳幼児の父親についての調査

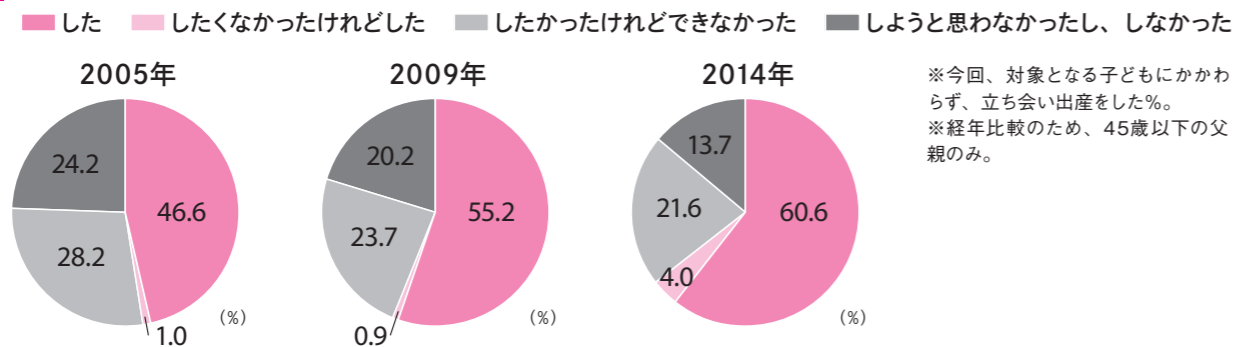
ベネッセ教育総合研究所では、0歳から6歳（就学前）までの子どもを持つ父親を対象に、子どもと関わる様子、家族との関係、仕事と家庭のバランスなど、乳幼児を持つ父親の家庭生活の実態や子どもや家族に対する意識を捉えることを目的にアンケート調査を実施しました。この調査は、2005年8月、2009年8月にも実施しており、今回は3回目になります。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ教育総合研究所「第3回 乳幼児の父親についての調査」(2014)）。

出産への立ち会いは経年で増加し、2014年には6割を超えた

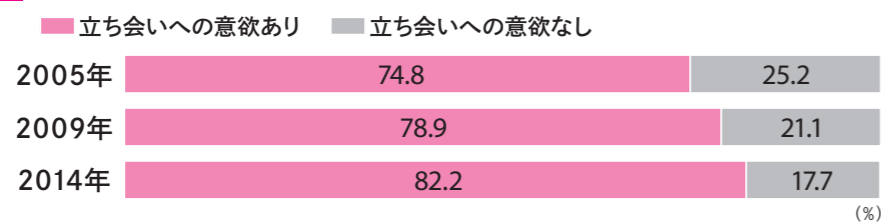
Q あなたは親として子どもの出産に立ち会いましたか。

図1 立ち会い出産をしたか（経年比較）



※今回、対象となる子どもにかかわらず、立ち会い出産をした%。
※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

図2 立ち会い出産への意欲（経年比較）



※立ち会いへの意欲ありは、図1の「した」「したかったけれどできなかった」を合計した数値。立ち会いへの意欲なしは、「したくなかったけれどした」「しようと思わなかったし、しなかった」を合計した数値。
※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

研究員解説

父親が出産に立ち会った割合は、2005年から2014年の9年間で17ポイント増加しました（図1参照）。2014年では、64.6%の父親が立ち会い出産を行い、過半数を超えています。また、出産立ち会いへの意欲（「した」「したかったけれどできなかった」の合計）をみると、2014年は約8割をしめており、出産の立ち会いに意欲的な父親の様子が

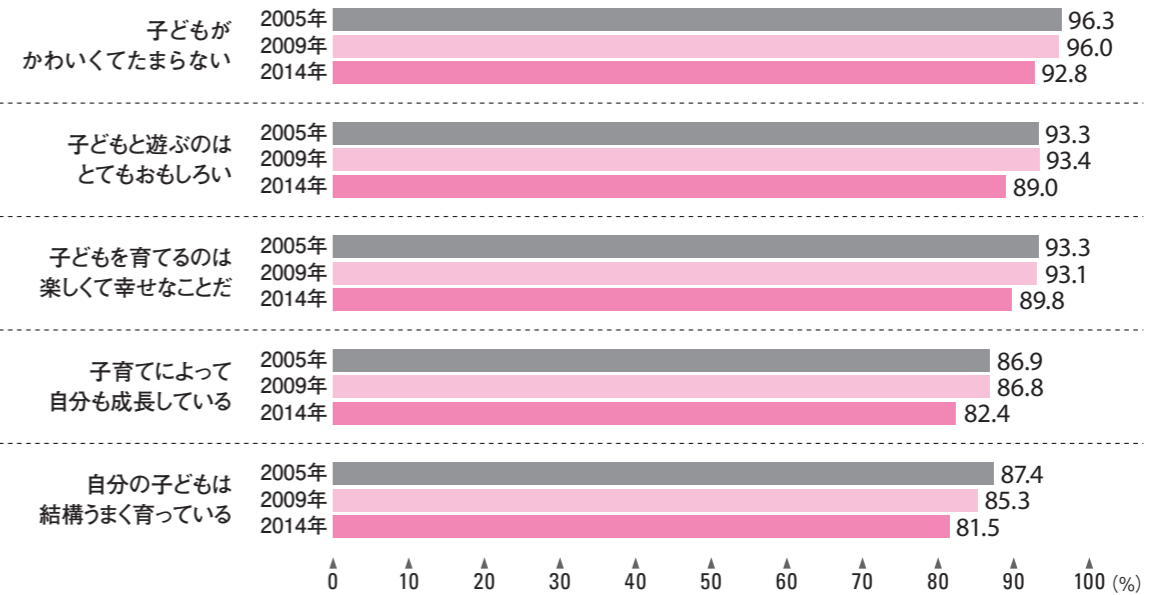
うかがえます（図2参照）。一方で、「子どもの出産時には休みをとりやすいか」という質問で「あてはまる」と回答した父親の方が、出産に立ち会う比率が高い傾向がみられます。立ち会う意欲はあっても、実際に立ち会えるかどうかは、本人や家族の意識だけではなく、職場環境なども関係していることがうかがえます（添付図なし）。

高岡純子○ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室 室長。妊娠・出産や子育てなど就学前の家庭を対象とする調査研究に携わる。

子どもとの接し方に自信がもてない父親が増える傾向に

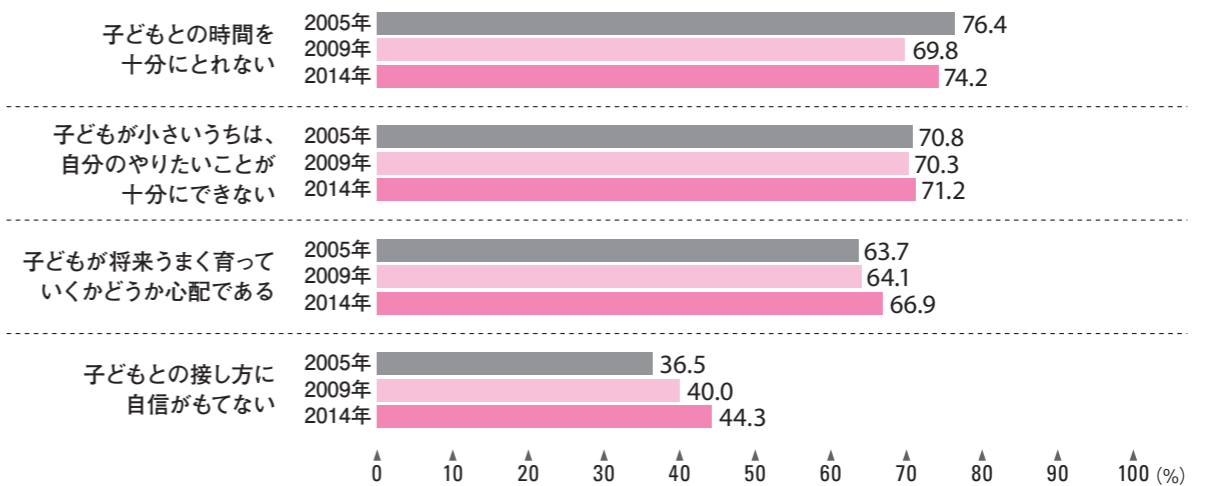
Q あなたは、最近次のようなことをお感じになることがありますか。

図3 父親の子育て意識〈肯定的な感情〉（経年比較）



※「よくある」+「ときどきある」の%。
※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

図4 父親の子育て意識〈否定的な感情〉（経年比較）



※「よくある」+「ときどきある」の%。
※経年比較のため、45歳以下の父親のみ。

研究員解説

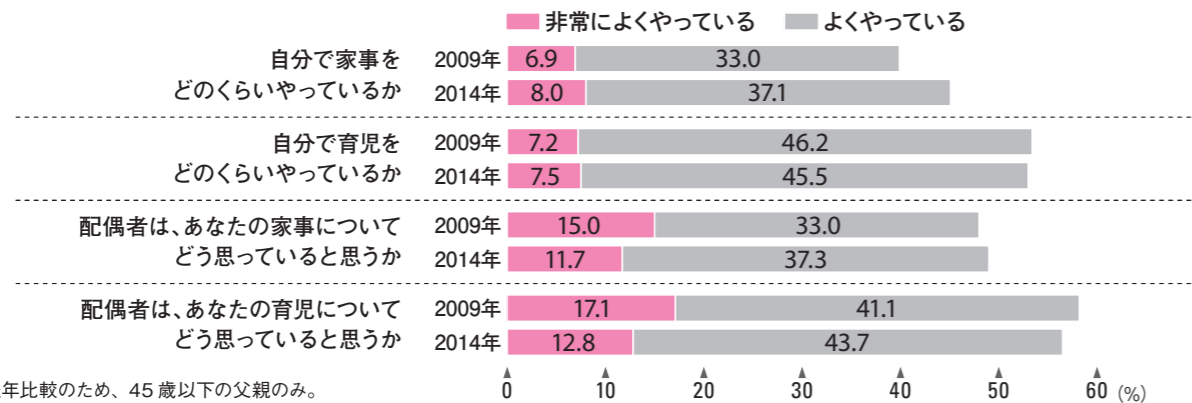
父親の子育て意識について、子育ての肯定的な感情（子どもを育てるのは楽しくて幸せなことだ、子育てによって自分も成長している等）と否定的な感情（子どもが将来うまく育っていくかどうか心配である、子どもとの接し方に自信がもてない等）について聞いています。全体的には9年間で父親の意識には大きな変化は見られないものの、子育てに対して肯定的な感情では、5つの項目すべてでわずか

ながら減る傾向がみられました。特に「自分の子どもは結構うまく育っている」はもっとも下がっており、子どもの育ちについて慎重に捉えている様子がうかがえます（図3参照）。一方、否定的な感情はわずかに増える傾向がみられました。特に「子どもとの接し方に自信がもてない」割合が増加しており、父親として子育てへの関わり方に戸惑う様子がうかがえます（図4参照）。

父親の家事への自己評価は上昇傾向に

Q あなたやあなたの配偶者に関して、該当するものをお選びください。

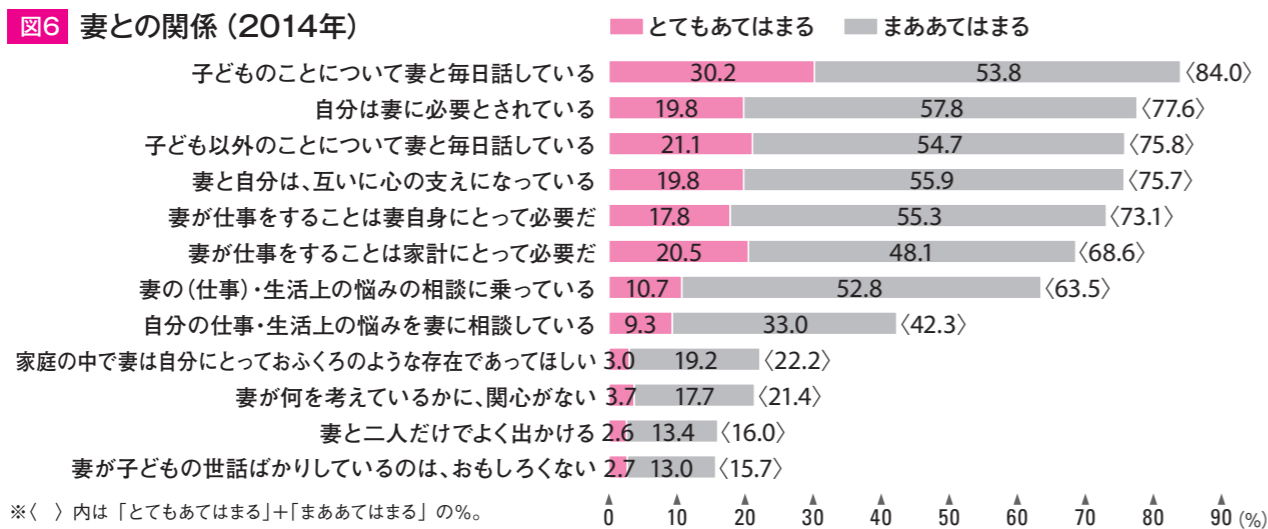
図5 家事・育児の自己評価 配偶者が自分をどう評価していると思うか(経年比較)



父親の8割以上が毎日子どもについて妻と会話

Q 配偶者との関係についておうかがいします。

図6 妻との関係(2014年)



研究員解説

図5は、父親の家事・育児に対する自己評価と配偶者がどう自分を評価していると思うかについてうかがったものです。父親の家事への自己評価は増加しています。実際の家事への関わりでも、増加している項目がみられます(「食事の後片付けをする」「ごみを出す」添付図なし)。一方、育児への実際の関わりは全体的に減少していますが、自己評価は変わりませんでした。

図6は配偶者との関係を聞いたものです。子どものことや子ども以外のことについて、妻と毎日話している数値が7割以上を占めており、妻とのコミュニケーションをよくとっている様子がうかがえます。一方で、「自分は妻に必要とされている」は、割合としては高いものの、9年間では減少している傾向がみられます(経年比較図なし)。

出典：第3回 乳幼児の父親についての調査
調査対象：0歳～6歳(就学前)の子どもをもつ父親 2,645名(20～49歳)
調査時期：2014年
詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。ぜひご利用ください。
▶ <http://berd.benesse.jp/>

調査地域：首都圏
調査方法：インターネット調査
調査項目：子どもや妻との関わり、家事・育児への関わり、仕事と家庭のバランス、育児観や将来への期待など

調査データを踏まえ、園ができる支援について考える

保育者の支援のもと、父親に子どもを受け入れ、育ちを楽しむ体験を



白梅学園大学子ども学部教授

福丸 由佳

ふくまる・ゆか

専門分野は家族心理学、臨床心理学。「仕事と家庭の多重役割」「家族支援」などが現在の研究テーマ。

子育てに参加するからこそ父親も不安を抱く

夫の立ち会い出産について、この9年間で、立ち会い出産を「しようと思わなかった」という割合がかなり減っています(P.14図1参照)。「出産に立ち会うことで、自分も妻と一緒に親になるスタートラインに立ちたい」という父親が増えているのかもしれないですね。

ただ、立ち会い出産を「したかったけれどできなかった」という人が相変わらず多いのも事実です。理由のひとつは、職場で立ち会い出産を経験した先輩がまだそれほど多くないということがあるかもしれません。育休取得を含めて、職場にモデルがいるかどうかは、男性にとっては特に重要な課題のような気がしま

す。

また、子育てに対する肯定感がわずかに減っている傾向が見取れますが(P.15図3参照)、これは実際に子育てする中で、やりがいや喜びと同時に大変さもわかり、現実感をもって捉えているのではないかと考えています。

子どもとの接し方に自信がもてないという意見が増えている(P.15図4参照)ことにも注目したいですね。これには、実際のノウハウが不足しているというケースや、夫婦間のコミュニケーションによるもの、また、雑誌やインターネットなど多くの情報にとまどっているケースなどがあるように思います。現代の母親の「少しでもよりよい育児をしたい」という思いから生まれる育児不安と似ているのかもしれない。

子どもを受け入れる楽しさを父親に知ってもらおう

こうした状況を踏まえると、保育者のみなさんが、父親に「子育てには絶対的な正解があるわけではない」「どの家庭も、いろいろなことに悩みながら子育てをしている」といったことを伝えることはとても意味のあることだと思います。そうしたことで、少しでも父親の気持ちが楽になるといいですね。また、日々の子どもの遊びや発想の中に育ちを見つかるという、園で保育者のみなさんが日々感動を味わっていることを、ぜひ保護者にも伝えてほしいと思います。

そのためには、父親も足を運びやすい園、子育てと一緒に楽しめる園になることも大切です。とはいえ、父親は母親と比較すると、すぐに保育者や他の父親とおしゃべりできるというわけにはいかないこともあるでしょう。力仕事をはじめ具体的な作業をしながらだと自然と会話が弾むこともあるので、そんな機会をつくることも一案です。

園と父親の関係がより近くなることで、子どものありのままの姿を観察し、受け入れることの大切さを実感できると思います。保育者が大きな心と確かな見通しをもって子どもと接していることも伝わり、お互いの理解が深まるチャンスになると思います。

